23

日露戦争における陸軍病院船の運航状況

柳川　錬平
順天堂大学

日露戦争では，100万人を超える日本の将兵が日本海を超えてユーラシア大陸東部の各地へ派出され，ロシアの南侵を阻止すべく死闘を繰り広げた．戦地から野戦病院等を経て内地へ後送された傷病兵（捕虜を含む）は約15万人に及んだが，その海上輸送を主に担ったのは陸軍の病院船および患者運送船であった．

小林義秀の先行研究によって，日露戦争で陸軍は20隻の貨客船（「博愛丸」・「弘済丸」・「横濱丸」・「ろせった丸」・「ろひら丸」・「御吉野丸」・「土洋丸」・「大連丸」・「チョイサン丸」・「河野浦丸」・「幸運丸」・「樺太丸」・「東英丸」・「小雛丸」・「神宮丸」・「羽後丸」・「吉生丸」・「近江丸」・「（第一）琴平丸」・「山城丸」）を徴傭し病院船として運用したことが知られているが，細川源太郎が見聞録を残した「弘済丸」を除いて，これまで具体的な活動内容について公刊戦史を超える情報は得られていなかった．今回，陸上自衛隊衛生学校（彰古館）が所有する史料から『病院船運行表』および「樺太丸」の『陣中日誌』の一部を発見し，陸軍病院船20隻の運行経路および各寄港地における揚降患者数と，わずかに1隻分のみながら陸軍病院船における日々の勤務状況とを解明できたので報告する．

『病院船運行表』は野戦衛生長官部が陣中日誌附録として発簡したものであり，彰古館には明治37年3月から明治38年12月までの分が残存していた．「博愛丸」を筆頭に20隻の病院船が順次投入され，それぞれの航路で患者を収容しては内地で陸上医療機関へ引き継いで再び戦地へ赴くことを繰り返していた様子が，ダイアグラム形式で記録されており，それぞれの港で収容・揚陸した患者数も併記されている．但し，運行表の末尾（明治38年12月31日）の時点でも3隻は外地に所在しており，9月の終戦から3か月が経過した後も外地からの患者搬送は続いていたことが窺える．

一方，発見された「樺太丸」の『陣中日誌』には明治38年5月11日から明治39年10月16日まで，日本赤十字社医員 小池鎌之介→陸軍3等軍医正 渡邊東春→同 武市直次郎と3代の軍医長が交代する中での日々の天候・所在地・収容患者数および将校患者の内訳が記録されているが，病院船として初めて宇品を出港した明治37年12月15日から明治38年5月10日までの日誌は含まれなかった．「樺太丸」の艤装図も未発見であるため正確な船内構造は不明であるものの，同日誌において船内で手術が行われたとする記述は見出せず，治療のための設備は最小限であった可能性がある．また，行動に関する命令は各碇泊場司令官から病院船軍医長に発出されたことが記載されており，病院船では軍医長が指揮を執っていたことが確認された．1寄港地での患者収容数は最大で333人であり，ほぼ同じ大きさ（総トン数で約3000トン）の海軍病院船「神戸丸」および「西京丸」（病床数178床）よりも多くの患者を収容していたことが明らかとなった．

今回発見された史料から，もともと母集団の大きい陸軍では海軍の10倍以上の規模（「収容患者数」×「航海数」×「隻数」）で患者搬送を行っていたことが確認された．運用構想についても，海軍が治療手段として病院船を運用したのに対して，陸軍では搬送手段として運用していた，とする従来の説が裏付けられた．また，当時の陸軍病院船でも海軍と同様に軍医長が指揮を執っていたが，「樺太丸」では約1年半で2回の軍医長交代が行われていたことから，その任期は1年前後であったことが窺えた．さらに，病院船軍医長の階級は海軍が軍医大監であったのに対し，「樺太丸」では3等軍医正（海軍の軍医少監に相当）であったことから，病院船の部隊としての格付けにおいても陸軍と海軍とで相違が有ったものと推測される．